

三次市民ホール きりりを訪れて

建築デザイン学科 cp20007 石井涼也

三次市民ホール きりりを訪れるきっかけとなったのは匠会が主催する建築見学会に参加したことだ。

三次市民ホール きりりは広島県三次市にある市民ホールであり、設計は建築家の青木淳である。三次市民ホール きりりは箱が組み合わさってできたようなボリュームとサヴァオ邸を彷彿させる水平に連続した窓が印象的な外観となっている。内部空間はコンクリートの打ち放しと木材が融合した冷たく荒々しいようでどこか暖かみがあるデザインとなっている。メインの空間である2階は地面から5mの高さに位置する。青木淳がなぜ2階を5mも高く設計されたのかを知るには東日本大震災が起きた時代まで戻る必要がある。当時起こった震災の当事者ではなかったが、津波に襲われ、簡単にまちが壊れていく風景は青木淳の心の奥に置かれることとなった。そして2011年の秋に三次市民ホールのプロポーザルコンペが開催された。市内に3本の河川が流れており、洪水がしばしば起こるこの地域は東日本大震災の記憶を思い出させる条件であった。そこで青木淳は2階の床レベルを5m高くするという大胆な方法を提案しコンペを勝ち抜いた。実際、竣工後2度にわたって洪水に見舞われた。しかし5mという高さまで高くすることによって浸水することは免れた。さらに、1階部分の駐車場は道路に比べ1m弱低い場所に位置するので、洪水が起こった際、道路が浸水することはなく、駐車場が貯水場の役割を果たしたのだ。

三次市民ホールには大きく分けて2つのコンセプトがある。1つは先述した洪水を見据えた構造とすることである。そして2つ目は演者と客という「表」と「裏」の関係をなくすことである。通常のホールでは客はエントランスとホールを利用し、演者は控室、楽屋、会議室などを利用する。だが、イベントが開催されるのは年に数回程度であり、地域コミュニティ形成の場であるにもかかわらず、利用頻度は低く、役割を果たしていない場合が多い。しかし三次市民ホールは各個室や機材搬入口など通常関係者以外立ち入り禁止とする部分なども廻廊とし、地域の人々が個室を利用できるようになっている。(※写真1) 個室と廻廊の関係はまるで「まち」のようである。エントランス横のホワイエにはホールへと続く廻廊との間に可動間仕切りを設け、戸を開放している時は開演までの時間を待つ空間として機能し、戸を閉めれば会議室や客のたまり場となる。このように、市民ホール全体を使い倒すということもコンセプトとして考えられている。青木淳曰く、過去にこのような「表と裏の関係をなくし自由に客が行き来できる」という例を見たことがないとのことで、実際に訪れてみると、普段は入れない「裏」の空間にいるという感覚は全く感じなかった。

廻廊には多くの窓があり、ハイサイドライトを設けることによって電力の消費を抑える工夫がされている。しかし、窓が多いと熱の出入りが多く、快適に過ごすことは難しい。管理人も夏は暑く冬は寒いという悩みを抱いているようだ。個室のスタジオに入ると、北側採光により室内はやさしい明るさに包まれていた。個室は音の響きを考え、廻廊側の壁

と室内側の壁との間隔が変化するように設計されている。(※写真2)

ホールに入るための階段の手すりは大人用と高齢者(子供用)の2つが設けられているが、それぞれの端部は長方形に仕上げられており、廻廊にも長方形を意識したような腰掛けがあり建築物の直方体のファサードを取り入れているのが分かる。(写真3,4) ホールに置かれている消火器は会場の雰囲気を損なわないように金属製のカバーで覆われており、ホールの雰囲気を損なわないディテールも考えられていることが分かった。

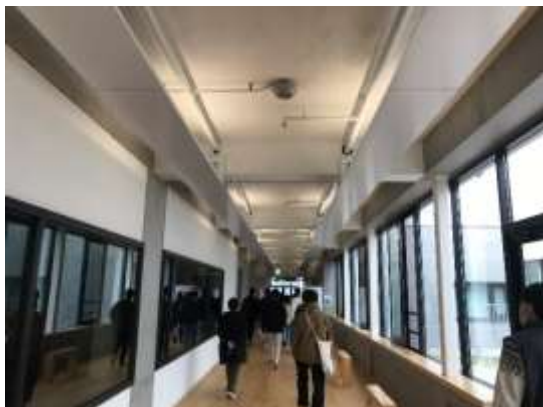


写真1

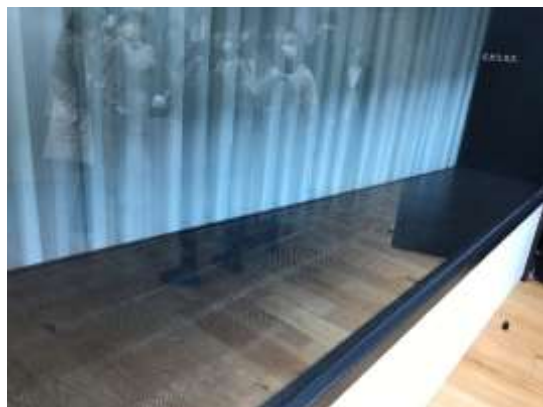


写真2



写真3



写真4